

宮沢賢治『グスコーブドリの伝記』における「技術者倫理」

Engineering Ethics in Miyazawa Kenji's *Gusukobudori no Denki*

笠井 哲

福島工業高等専門学校一般教科

Akira Kasai

Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(2012年9月6日受理)

Gusukobudori no Denki is the children's story which Miyazawa Kenji (1896-1933) announced to the child magazine the year before death. This children's story is the announcement work which is his life last. Kenji was known as the writer of children's story, but was the agriculture leader and the industrial engineer at the same time. The chief character, Budori practices the service that is devoted to prevent natural disaster in the thing of this work. This is suggestive in thinking about the modern engineering ethics. The purpose of this paper is to consider the engineering ethics in Miyazawa Kenji's *Gusukobudori no Denki*.

Key words: Miyazawa Kenji, children's story, *Gusukobudori no Denki*, engineering ethics

1. はじめに

『グスコーブドリの伝記』¹⁾とは、宮沢賢治(1896～1933)が、死の前年の昭和7年(1932)3月に童話雑誌『児童文学』に発表した童話であり、童話としては、彼の人生で最後となる発表作品である。賢治は、童話作家として知られているが、同時に農業指導者や工業技術者でもあった。

本作品の主人公・ブドリは、若くて有能な火山技師にもかかわらず、あっけなく亡くなってしまふ。ブドリが、自然災害を防ぐために献身的な奉仕を実践する姿は、現代の「技術者倫理」を考える上で示唆に富むものである。本稿の目的は、宮沢賢治の『グスコーブドリの伝記』における「技術者倫理」を考察することである。

『グスコーブドリの伝記』の論点は、次の四点である。第一に、兄弟(ブドリとネリ)の別れと再会である。第二に、近未来的な科学技術を駆使した自然災害の防御である。第三に、他者の幸福のために自らの死を引き換える「自己犠牲」の精神である。第四に、賢治の農民救済活動との関連である。第二、第三、第四の問題は、宗教による救済と科学による救済とを、如何に関連付けるかという、賢治のテキスト全体を貫く究極の課題といえる。本稿ではこれらの三点にも目を配りながら、「技術者倫理」について検討して行く。

2. 物語の背景

宮沢賢治は、岩手県稗貫郡里川口村(現花巻市)に、質・古着商の宮沢政次郎の長男として生まれた。賢治は、幼い頃から鉱物や昆虫の採集に熱中した。彼は、旧制盛岡中学を経て、盛岡高等農林学校(現岩手大学農学部)を卒業し、上京して本郷菊坂町に下宿し、謄写版政策の職に就きながら、童話の創作を続けた。

1921年に妹のトシが発病したため、岩手に帰るが翌年妹は死去した。稗貫農学校の教師になるが、1928年に農業指導の過労から急性肺炎を発症、ほぼ2年間は大実家で静養した。回復後、東山町の東北砕石工場技師になり、石灰肥料の販売を担当した。上京中病に倒れ、帰郷して再び療養生活に入るが、37歳で世を去った。

賢治の生前に刊行されたのは、詩集『春と修羅』と童話『注文の多い料理店』だけである。この他、雑誌や新聞投稿や寄稿した作品もある。『グスコーブドリの伝記』もその一つである。昭和7年(1932)4月、雑誌『児童文学』第2号に発表された。まだ無名だった28歳の棟方志功が挿絵を描いている。

この童話は、1921年頃までに初稿が執筆されたと見られる『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』²⁾が下敷きになっている。それが、『グスコーブドリの伝記』³⁾を経て、『グスコーブドリの伝記』へと発展して行くのである。

『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』で、ネネムは、「ばけもの世界」に住んでいる。ばけもの世界は、イーハトーブのように人間の現実世界と地続きではなく、こちらとあちらという明確な境界を持つ別世界である。もしあちらに姿を現せば、「出現罪」として罰せられる。しかし、世界の組成が特殊ではなく、自然現象としての飢饉もあれば、火山の爆発もある。

賢治は、この草稿をもとにして、ほぼ10年かけて書き直した。その時の推敲の過程を示す『ペンネンノルデは今はいないよ』という創作メモが残されている。昭和6年(1931)頃には、『グスコブドリの伝記』とほぼ同じ内容の『グスコブドリの伝記』を書き上げた。それは、賢治が亡くなる前々年である。

ネネムからブドリへ大きな変化は、ネネムが慢心によって出現してしまったために自らを裁く物語から、人々のためにブドリが生命をかけて、火山を爆発させる自己犠牲の物語にそのテーマを変えたことである。『グスコブドリの伝記』は、『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』が大幅に改作され、科学技術者の伝記へと変貌する。

農業技術者として農民の指導に当たるかわら、小説や詩や児童書を書き、岩石や火山を研究し、音楽や絵画を愛好した。これらの幅広い知識が重なり合い、この不思議な童話が生まれたのであろう。

彼は科学を駆使し、農民の窮状を救おうとする。例えば、本書を有名にした、二酸化炭素を噴出させて温暖化を引き起こすアイデアである。この時代に、二酸化炭素による、温暖化効果の知識を持っていたことは驚きである。これにとどまらず、海岸に沿って200基の潮汐発電所を配置する。人工降雨と一緒に、窒素肥料を降らせることも考えていた。実用化されたのは、潮汐発電所が29年後、人工降雨は14年後である。

さて、東北地方は、常に冷害の脅威にさらされてきた。宮澤賢治の作品を読むと、東北地方の過酷な気候で米をつくらねばならない人々の苦難がのぞく。賢治の「雨ニモマケズ」の詩の中に、「サムサノナツハオロオロアルキ」とあるように、繰り返し夏季の低温に悩まされた。

斎藤文一は、この詩の「サムサノナツ」は賢治きつての名言だという。現代ほど気象に関する知識がなく、その予測も難しかった時代に、冷夏を警告し、

人間は、この事態を前にして、どのように対応すべきなのか。農民の立場に立って、大地と気象を見つめ、探求しなければならぬ。賢治はそういっ

ているのだ⁴⁾。

という。この「サムサノナツ」を何とかしようと主人公ブドリが立ち上がるのが、『グスコブドリの伝記』なのである。

3. ストーリーと特徴

では、『グスコブドリの伝記』のストーリーは、如何なるものであろうか。

イーハトーブの木樵の子として生まれた、グスコブドリには、ネリという妹がいた。ブドリが10歳の年から2年間冷害が続き、食料を残して父母は姿を消す。ネリは音にさらわれる。

ブドリは後から来た男によって、テグス工場にされた自分の家で働かされる。噴火で逃げたブドリは、6年間百姓の手伝いをするが、干ばつと冷害続きでうまく行かず、イーハトーブ市に出て、クーボー大博士の紹介で火山局に就職する。

科学技術を駆使し噴火被害を防ぎ、空中放電で窒素肥料を降らす。ブドリ27歳の年に大冷害が起こる。カルボナド火山を噴火させることができれば、地球の温度を上げることができると知ったブドリは、死を顧みずに志願し、冷害を救う。

以上が、『グスコブドリの伝記』の大まかなストーリーである。その特徴は、如何なるところにあるのであろうか。遠藤周作は、賢治の童話について、

単なる童話ではなく、一種の成長童話である⁵⁾。と称した。成長童話とは、主人公の成長過程を発展的に描写する、あるいは読者が成長できる内容の童話であるということであろう。

この意味では、希望の童話あるいは教養童話ということにもなる。このような見方もできるが、いずれにせよ、本作品はそれ以上の作者の強い意思や意図が感じられる。それは、農民への強い意思と彼らへの命をかけての救済である。

本作品には、基盤的なテーマとしての教育がある。ブドリは、教育されるとともに成長し、成長するに従い、その段階に応じた教育を受け、学習し、体験し、研究してきた。

ブドリは幼い頃、森の中で木こりの父と母のそばで、妹と一緒に遊び育った。自然の美しさや活力性を味わい、樹木や鳥の名前を覚え、さらに人間や自然の怖さを知った。テグス工場では網掛けの仕事を手伝い、その仕事や生活することの厳しさを知った。ブドリは仕事が終わって、森と工場の番をしながら、家の中で見

つけた本を読んだり、書いたりして、一生懸命に勉強した。実際に賢治が店番をしながら勉強していたことを思わせる光景である。そして今度は、沼ばたけでオリザを作る手伝いをし、実体験を通して様々なことを学んだ。主人からは「オリザを作る工夫」を依頼され、いろいろな本を読み勉強し、一定の成果を上げた。

森の中と沼ばたけでの経験から、ブドリは働きながら勉強しようと、クーパー大博士の学校に入学した。大博士の物の考え方を知り、本当の勉強をし、仕事を見つけるためであった。卒業は非常に難しかったが、一生懸命に勉強し、知恵を働かせて見事に合格した。ブドリは大博士に紹介されて、イーハトーブ火山局に就職した。老技師からは器械や設備、火山情報、観測方法等を学び、自らも昼夜にわたって、働きながら一心に勉強した。あちこちの火山に行ったら、器械の設備や修繕等をこなして、このようなことをして様々な火山の様子や性質を知り、老技師の仕事も手伝えるようになった。

ブドリは技師心得になり、火山を巡回し、危険な火山があるときにはこれを工作するのであった。また、水不足の際には人工降雨、肥料不足には人工肥料の散布を実施した。潮汐発電所が設置されて、電気仕掛けで容易に出来るようになっていた。最後に残ったのが冷夏対策であり、火山を爆発させて気温を上昇させることになった。

ブドリは、いつも働きながら勉強し、成長して行った。実践で技術や技能を身につけると同時に、現場の課題や問題を知り、その解決策を探りながら科学的理論を学んだ。そこには、実践と理論の、勤労と学習との不即不離の関係があったように思う。したがって、ブドリが教育を受け、あるいは学習する時には、そこには勤労があり、人間的成長も期待できた。そして、一つのことが解決できると、人間的にも成長し、新たに大きな課題が生まれ、学習と実践のいっそうの努力が可能になっていくのである。

また、『グスコープドリの伝記』は、農村や農民のために貢献した一人の男の伝記であるが、それは賢治の体験や様々な経験を踏まえたものである。彼自身のあるいは、彼の思想や精神に関連する伝記であるとするのが多数の説である。山折哲雄は、

賢治が、自分の一生を天啓のような直観によって要約した、心優しい自叙伝であった⁶⁾。

とし、小西正保は、

理想でもなく、側面でもなく、ほぼ賢治そのもの、

賢治の存在そのものがブドリである⁷⁾。

とする。思想や精神はともかく、賢治自身の生い立ちや生活、経験とは明らかに異なる部分があり、自叙伝や賢治そのものの伝記とするのは、少なからず無理があるであろう。すなわち、本作品は、賢治自身やその存在を描写したものではないが、概ね賢治の生き方や実践的経験、思想・精神などを書き著したものであろう。岡田純也は、

羅須地人協会時代の実践的農村救援活動、東北砕石工場時代の石灰肥料による、土地改良を中心にすえた賢治の自伝的作品である⁸⁾。

とする。また、境忠一は、

ただ少年小説だけでなく、むしろ自伝的な小説として対象化させる特徴をもたせている⁹⁾。

と指摘する。しかし、自伝的作品とするには、自叙伝であるという主張と同様に疑問が残る、自伝的要素を含む作品として、その評価をどうとめておくべきである。

では、如何に考えるべきであろうか。本作品は伝記であって、人の一生の出来事が書かれているが、それは様々な人生の一つの例に過ぎないかもしれない。そこにあるのは、生涯を通じて必要な人のあり方や生き方、考え方である。その中には希望があり、願いがあり、愛があり、社会があり、農民の現実がある。農民を救済するために献身的になるのも、命を捧げるのも一つの生き方であり、一般社会向けに公式化できることではない。したがって、通常の物語でなく、伝記の形式をとっているのである。

4. 科学と宗教

『グスコープドリの伝記』では、ブドリの行う改革の科学性が問題となる。この作品が構想されていた当時の地球科学の水準として、アレニウスの『宇宙の進化』（1921）が適当である。アレニウスは、

空気中に於ける炭酸瓦斯の量が二倍となるに至れば、地球表面の温度は四度昇るべく、四倍となれば温度は八度昇るに至るべきなり¹⁰⁾。

との自説を唱えた。賢治が『グスコープドリの伝記』を書くにあたり、稲の生育に必要な条件である、東北地方の気温を心に留めていたであろう。凶作の恐れのある危険温度を超えられない低温、すなわち本作品では、この低温を科学的根拠において上昇させようとする、一種のトリックを使うために、火山爆発とこれに伴う炭酸ガスの噴出から気温上昇に至る、一連の現象についてまとめたアレニウスの法則は、大いに参考に

なったと思われる。

『グスコープドリの伝記』の課題解決に、科学的根拠があるのだろうか。あるいは、そこに科学的発展性を見ることができるのであろうか。それとも、科学的解決を求めず、その根拠も希薄で宗教に逃れ、宗教に頼っているのではないだろうか。

さらには、科学と宗教を探求したところの究極において、それらを統一した解決としているのではないか。それとも、科学と宗教は渾然として分離し、あるいはその両面が放棄されてしまったのか。これらのいずれであるのかの問題が浮上する。

宮城一男は、地学者としての科学的立場から、

(1) 火山予知という今日の地学(火山局)の重要テーマに対する賢治のすぐれた意見と夢を見ることができ、(2) 国民(この場合は農民)のための科学を利用し、自然を改造していこうという賢治の姿勢をとらえることができる¹¹⁾。

と肯定的に述べている。すなわち、宮城は作品の科学性を評価するとともに、その不足する部分を宗教ではなく、「夢」や「姿勢」として捉えている。

科学と宗教の作品に關与する度合い、あるいはその影響はどの程度なのだろうか。東光敬は、

科学と宗教との究極の位置を探求したもので、究極における精神の優位、宗教の勝利を認め得たものである¹²⁾。

とし、究極において宗教の優位性を主張する。この宗教優位の主張に対して、岡田純也は、

宗教的傾向の類に属するべき作品であるが、科学が殊に強調されて、現実改良が全面に現われている¹³⁾。

とする。両者とも、科学と宗教の関係性を認めながらも、その究極的な位置においてはわずかにどちらか一方に偏しているのである。

賢治は、地方に存在する大地、土壌などを大事にする一方で、都会的な非自然性—人工物を嫌う傾向があった。これらの傾向は作品にも生かされ、あるいは、反映されていると思われる。国分一太郎は、

賢治の童話には、自然のけしきや虫や鳥やそのほかの動物の姿を、じつに生き生きとかいてある¹⁴⁾。と述べている。

本作品では、どうであろうか。夏の寒さや日照りによる自然災害も一種の自然の災いであり、これを解決しようとする火山爆発や人工降雨は、いたって人工的である。発電やその発電による肥料の人工散布、火山

灰防止のための火山爆発方向の転換策も、人工的である。

自然は、人間にとって良いことも良くないことも、一切を含めて自然である。賢治は、良くない自然に対抗して、良い人工装置で解決しようとした。しかし、自然を大切にする自然愛好者であれば、このような手段を用いる解決法は、最小限にとどめるべきではないだろうか。

『グスコープドリの伝記』には、不自然さを感じさせる点があることを指摘しておかねばならない。それは物語後半で、近未来的な科学技術を駆使した農業改良等が扱われているにもかかわらず、なぜブドリ一人が死ななければならないのか、飛行船や長い電線を使って火山島を爆破すれば、死ぬことはないはずだ、という感想を誰もが抱かざるをえない点である。ここから、他者のために死を選ぶという宗教的なモチーフの突出を、見出すことも出てくるであろう。

上述のように、本作品に賢治の科学者や農学者、技術者としての姿勢、その実践的な科学や技術の駆使の姿を垣間見ることができる。実践的科学は、理論研究的な純粋科学と異なり、実践に直接役立つ科学である。ブドリは、農民のために、可能な限り科学や技術を利用して実践的に役立てようとしたのである。

宮城一男は、本作品についてさらに詳しく分析し、

(1) 火山噴火の予知という今日の重要テーマがもりこまれていること、(2) 自然改造という問題を考えていること、(3) 科学の夢を描いていること、(4) 農民に役立つ科学を—というねらいが込められていることなど、すばらしい科学者としての姿勢がにじみ出ている作品¹⁵⁾

であるとしている。しかし、人間性や宗教性を無視して、科学技術のみで理解しようとすることは、物語としてはそれほど価値もなく、あるいは一面的な見方とも解釈できる。したがって、人工火山爆発の設定やブドリの犠牲死を納得させることは、少なからず難しいのではないかと考える。

『グスコープドリの伝記』では、人間性と科学性の両側面から見ようとする立場がある。そこでは、農民のためのブドリの献身性と、農業的課題に対する科学技術による解決の両者が、主要テーマとなる。宇佐美英治は、ブドリの行為について、

人間の献身的愛であると同時に、まず科学的な思考であり、技術そのものの体質改善であることを示している¹⁶⁾。

と述べている。愛と思考、また体質改善という抽象性をテーマとしたことに、科学性よりも人間的な高さや深さ、優しさを感じとることができる。いつの時代の技術者にも求められる「技術者倫理」の思想が、ここに見られるのである。

5. 技術者倫理—おわりにかえて—

農民のための自然災害に対する救済は、科学的思考によって図られ、その奉仕による実践化によって解決されるべきなのであった。また、そのために、献身や自己犠牲もありうるであろう。宇佐美英治は、

科学的思考の必要とそれに救いを解く¹⁷⁾

ことが根本的なテーマであるとする。人間性とともな科学性もまた、本作品には不可欠なテーマなのである。『グスコーブドリの伝記』の終わりの方に、次のようにある。

「先生、気層のなかに炭酸ガスがふえて来れば暖かくなるのですか。」

「それはなるだろう。地球ができてからいままでの気温は、たいいてい空気中の炭酸ガスの量でまわっていたと言われるくらいだからね。

「カルボナード火山島が、いま爆発したら、この気候を変えるぐらいの炭酸ガスを、暮くでしょうか。」

「それは僕も計算した。あれがいま爆発すれば、ガスはすぐ大循環の上層の風にまじって、地球ぜんたいを包むだろう。そして下層の空気や地表からの熱の拡散を防ぎ、地球全体を平均で五度ぐらい暖かくするだろうと思う。」

「先生、あれを、今すぐ暮かせられないでしょうか。」

「それはできるだろう。けれども、その仕事に行ったもののうち、最後の一人はどうしても逃げられないのでね。」

「先生、私にそれをやらしてください。どうか先生からペンネン先生へ、お許しの出るようなお話を下さい。」

「それはいけない。きみはまだ若いし、いまのきみの仕事に代わるものはそうはいない。」

「私のようなものは、これから沢山できます。私よりもっともっと何でもできる人が、私よりもっと立派にもっと美しく、仕事をしたり笑ったりして行くのですから。」

「その相談は僕はいかん。ペンネン技師に相談し

たまえ。」

ブドリは帰って来て、ペンネン技師に相談しました。技師はうなずきました。

「それはいい。けれども僕がやろう。僕は今年もう六十三なのだ。ここで死ぬなら全く本望というものだ。」

「先生、けれどもこの仕事はまだあんまり不確かです。一ぺんうまく爆発しても間もなく瓦斯が雨にとられてしまうかもしれませんし、また何もかも思った通りいかないかもしれません。先生が今度にお出でになってしまつては、あと何とも工夫がつかなくなると存じます。」¹⁸⁾

高木仁三郎は、次のようにいう。

つまり、何もすぐれた人間の営みではない。普通の人間の営みとしての科学ということ、賢治は考えていたのです。だから私は、すぐれた科学者としての賢治というふうに、あんまり祭り上げたくないのです。もちろん、彼はそういう事を考えた上で、非常にすぐれた人であったけれども、誰でもできる科学というものを、もっと志向していたのではないか。まさに、上のくだりのあとで、このことにブドリは成功します。しかし、それによってブドリは、生命を失うことになるわけですよ¹⁹⁾。

このことについて、従来の作品評は悲劇的に捉えるものが多かった。科学の限界というものを指摘する評もあり、そこでブドリが死ぬことでしか解決しなかったのは、とても悲劇的であり、成功ではないのではないかという言い方もされてきた。しかし、高木は次のように捉えている。

私は、あまり宗教的な観点というものがわからない人間ですので、そういう面から言うのではありませんが、この作品のこの結末は決して悲劇的ではないと思うんです²⁰⁾。

高木は、このように自身を、「宗教的な観点というものがわからない人間」といいながら、結末については、仏教的な観点を持ち出してくる。それは、

そしてちょうど、このお話のはじまりのようになる筈の、たくさんのブドリのお父さんやお母さんは、たくさんのブドリやネリといっしょに、その冬を暖かいたべものと、明るい薪で楽しく暮らすことができたのでした²¹⁾。

という結末について高木が、

これは単にメダシ、メダシではなくて、むしろ

ろ、ブドリの試みというのが、また新しいブドリやネリに伝わって行くという、エコロジーの言葉でいえば、一種の循環ということを示しているのです。一つの死が次の生へとつながって行くという、仏教的に言えば輪廻ということになるのでしょうか²²⁾。

といているところからわかる。これについて、赤坂と山折哲雄は、「東日本大震災」に関連づけ、次のようにいっている。

赤坂 賢治が『グスコブドリの伝記』で描いたのは、科学者のモラルや犠牲を前提にしてしか成立しない科学技術であり、未熟ゆえに人間の犠牲によって補完することなしにじゃ、完結しない科学技術ですよ。今回の災害でわれわれは原発がどれだけ未熟で、人智では制御しえない技術であるかを思い知らされたわけですが、そこにはみずからを犠牲にして働いた、ブドリのような科学者の姿はなかったといえるのかもしれない。テレビに出ていた原子力の専門家たちは、科学者を自称する人たちもいたでしょうけれど、おそらくまったく現場を知らない人たちでしょう。

山折 結果的に三人称で語っていたからね。

赤坂 きっと彼らは現場でなにが起こっているのか想像できなかったと思いますよ。

山折 賢治が科学は冷たいと言ったのは、逆にいえば、その冷たい科学を乗り越えるためにどうしたらいいか、ずっと考えていたからではないかと思います。科学者、あるいは専門家のひとりとして紡ぎ出した最後の物語が『グスコブドリの伝記』だったとなると、まさに賢治の一生というのは科学者の思想という問題にとどまらない、科学者の社会的責任というものを、実践的にみずからに問うた一生だった、と言えるのかもしれない²³⁾。

宮沢賢治が、『グスコブドリの伝記』で描いたブドリの生き方は、現代においても必要とされる「技術者倫理」である。現実には、童話ほどのドラマ性は求められないであろう。しかし、自然災害から公衆の安全を守るという、専門職業人としての社会的責任を果たすことは、技術者に課せられた重大な義務であるといえよう。

文 献

1) 宮澤賢治：グスコブドリの伝記，校本宮澤賢治全集 十一巻 所収（筑摩書房、1974）

- 2) 宮澤賢治：ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記，校本宮澤賢治全集 十巻 所収（筑摩書房、1974）
- 3) 宮澤賢治：グスコブドリの伝記，校本宮澤賢治全集 十巻 所収（筑摩書房、1974）
- 4) 斎藤文一：科学者としての宮澤賢治，p. 52（平凡社、2010）
- 5) 遠藤周作：「グスコブドリの伝記」p. 123，草野心平編：宮澤賢治研究 I 所収（筑摩書房、1981）
- 6) 山折哲雄：賢治の風光，p. 86（佼成出版社、1985）
- 7) 小西正保：随筆・宮澤賢治，p. 197（岩崎書店、1979）
- 8) 福田清人・岡田純也：宮澤賢治，p. 187（清水書院、1966）
- 9) 境忠一：「グスコブドリの伝記」と「グスコブドリの伝記」，p. 120，宮澤賢治童話の世界 第22巻第3号 所収（すばる書房、1976）
- 10) アレニウス：宇宙の進化，p. 70，一戸直蔵訳（大鏡閣、1921）
- 11) 宮城一男：農民の地学者 宮澤賢治，p. 158（築地書館、1975）
- 12) 東光敬：宮澤賢治の生涯と作品，p. 216（百華苑、1949）
- 13) 福田・岡田前掲書，p. 193
- 14) 国分一太郎：宮澤賢治，p. 112（福村出版、1969）
- 15) 宮城一男：「グスコブドリの伝記」—自然改造への願い，p. 140，文芸読本 宮澤賢治 所収（河出書房新社、1977）
- 16) 宇佐美英治：「グスコブドリの伝記」について，p. 171，草野心平編：宮澤賢治研究 II 所収（筑摩書房、1981）
- 17) 同前，p. 174
- 18) 宮澤賢治：グスコブドリの伝記，pp. 228—229
- 19) 高木仁三郎：宮澤賢治をめぐる冒険，p. 230，高木仁三郎著作集 第九巻 所収（七つ森書館、2004）
- 20) 高木同前，p. 231
- 21) 宮澤賢治：グスコブドリの伝記，p. 229
- 22) 高木前掲書，p. 231
- 23) 山折哲雄・赤坂憲雄：反欲望の時代へ，pp. 108—109（東海大学出版会、2011）